はじめに——英雄伝説と日本

日本の歴史上、最大の悲劇的ヒーローといえば、源義経を挙げる人が多いのではないだろうか。幼少の牛若丸時代の活躍から始まり、一ノ谷・屋島・壇ノ浦で平家追討に大きな勲功を上げながらも、兄・頼朝から反感を買い、一時は九州へ逃れようとするが、失敗して東北を目指した。この間、弁慶など多くの著名な従者たちに助けられつつ、奥州平泉の藤原秀衡の下にたどり着いたが、秀衡の子・泰衡の裏切りにより、衣川館において三一歳の若さで自害したとされている。

しかし実は義経に関する確実な史料は少なく、その行動は『平治物語』や『平家物語』『源平盛衰記』などの軍記物語によるほかはない。ただ後代の室町期に虚実を織り交ぜた『義経記』が成立して、多彩な挿話で飾られた伝説的な生涯が創出されるにいたった。

また義経の叔父にあたる源為朝も、超人的な武勇の持ち主であったが、やはり同様に悲劇の死を遂げている。一三歳の時に九州に追われたが、鎮西八郎と号して九州各地で大暴れし、それが原因で父・為義が解官させられたため京に戻った。折しも保元の乱が起こり、父とともに

崇徳上皇方として大活躍したが、敗れて捕らわれの身となる。弓の名手として知られたが、肩の筋を切られて伊豆大島に流された。しかし配流後も伊豆の島々を掠領したことから、国軍による追討を受け、三二歳で自害し、その首は京都へ送られ獄門とされたという。為朝は義経以上に史料が少なく、ほとんどが軍記物語『保元物語』によって生涯が語られ、これにさまざまな逸話が加えられたという点に特徴がある。

私はかつて、ある地名辞典の編集に携わっていたが、その過程で二つの英雄伝説の分布状況に興味を抱いた。二つの辞典のデータからパソコンで拾い出した私の荒っぽい推算では、義経の伝説が存在する地域は実に四二都道府県総計五〇八件におよび、為朝でも三六都道府県一九六件を数える。

このうちには「義経が座った岩」や「衣をかけた松」と称するもの、あるいは「義経の笛」と伝えるもののほか、「為朝が岩を投げた」というだけの場所や、「為朝の矢」とされるもの、またその子孫と称する者の伝承などを留めた程度のものも多く、さらには近世に勝手に由縁を創出して為朝社を建立したようなケースもある。とにかく何らかのかたちで、自らの地が義経や為朝に関係するのだということを強調して伝承が創り上げられている。ただ、それには何かの根拠が必要となるが、たとえ架空の話であっても、その土地との関連性が少しでも見出されさえすれば、伝説が成立する余地は充分なものとなる。

そうした伝説分布の特徴は、義経が北陸・東北のほか北海道にもっとも多いのに対して、為朝が伊豆を除けば九州に集中し南島を経由して沖縄にも及んでいる点である。ほぼ同時代に活躍した源氏の貴種である義経・為朝の英雄伝説は、この点できわめて興味深い好対照をなしている。義経伝説の場合は、源平合戦の主戦場であった関係から山陽や四国にも目立つが、悲劇的な逃走の舞台となった東北・北陸の方が圧倒的に多い点に注目すべきだろう。

また若き為朝の主な活躍場所が九州で、熊本の雁回山には、為朝が弓で毎日雁を打ち落としたことから、この山を雁が迂回して飛んだとする話もあるほか、その流刑地が伊豆であったことからすれば、北の義経・南の為朝という傾向は、当然の史実的結果となる。しかし、それだけでは二人が足を踏み入れたこともない青森・北海道や南島・沖縄の事例が説明できない。なぜこうした地に数多くの伝説が伝わることになったのだろうか。

さらに彼らの英雄伝説における最大の特徴は、二人の死後の物語にある。実際には、ともに衣川と伊豆で生涯を終えているが、伝説の方はとてつもない飛翔を遂げる。義経は、衣川では死なずに北海道に渡って、アイヌの人々の崇敬を集めたとされ、青森と北海道の事例が加わる。さらに中国大陸へ渡って清王朝の祖となったとか、最終的にはモンゴル帝国の始祖・ジンギスカンは義経だったという説へと展開する。また為朝も同じく生き延びて、伊豆から風に流され琉球の運天港に上陸したとされ、南島と沖縄へも伝承地が広がる。そして為朝は、大里按司

の妹と結ばれ（大里の比定地には糸満市の島尻大里城と南城市の島添大里城とがある）、その子・尊敦が琉球王の始祖・舜天王となったという話にまでなる。これもなぜだろうか。

もともと古代日本の中央政権は、当初、東北北部と九州南部を支配下におくことができず、ましてや北海道も沖縄も領域外の地でしかなかった。すでに平安時代の九世紀の段階でさえ、国家が安穏を祈る追儺の儀式において国内と認識していたのは、「東の方は陸奥、西の方は遠値嘉（小値賀＝五島列島）、南の方は土佐、北の方は佐渡」といった空間にすぎなかった（『貞観儀式』）。ちなみに古代においては、現在の北を東、また南を西と認識していたから、西の小値賀にはかろうじて九州の大半が含まれるが、東の陸奥もすべてを掌握していたかどうかは不明で、東北北部と九州南部の安定的な支配が、次の時代の大きな課題となる。

現実に義経や為朝が活躍した時代、つまり中世に入ると、実質的にも東北北部と九州南部が日本国家の枠内に収められ、鎌倉末期の妙本寺本『曽我物語』（角川書店本）巻三などにみられるように、〝北は外ヶ浜から南は鬼界ヶ島まで〟、つまり北海道と沖縄を除く地が日本であるという認識が共有されるにいたった。こうした国家領域の拡大においては、この時代の主役であった武士たちの果たした役割が大きく、中世を通じて彼らが北と南へ活発に進出したことから、後にみるように、北海道と沖縄の地が新たな併合の対象となっていった。そして中世後期の段階にいたって、我々が注目する二つの英雄伝説は、南北両極の地への渡海という飛躍を果たす

ことになる。

やがて近世に再び中央集権的な国家が出現すると、北海道では松前藩によって、アイヌの人々の生活圏を認めつつも、海岸線上の場所支配が実行された。いっぽう沖縄へは鹿児島藩が侵攻して、中国への朝貢を黙認したうえで近世石高制的な支配を強行した。こうして北海道と沖縄の地は、いわば半分ずつ日本となったのである。ただ沖縄は中世に琉球王国が成立して異国となったが、北海道のアイヌ民族は国家を創らず異域のままとされた。この双方の地で、義経と為朝の伝説は著しい変身を遂げる。そして日本を頂点とし、北海道と沖縄の支配を正当視する秩序意識が社会的に浸透する近世において、二人の英雄物語は、さまざまなかたちで出版され、壮大な伝説として広く庶民に親しまれるところとなった。

さらに近代にいたって明治国家が成立をみると、北海道と沖縄は全面的に日本に組み入れられ、ともに内国植民地的な様相を呈するにいたった。そして両極の地では、近代においても二人の英雄伝説が機能していた。義経＝ジンギスカン説は、日本の北方進出を心情的に支え、為朝伝説は琉球処分以降の日本同化に大きな役割を果たした。いずれにしても義経・為朝伝説の成長と展開は、日本の中央政権が列島の北と南を自らの領域として覆い尽くしていく歴史過程と、みごとにシンクロしている。それゆえ本書では義経伝説と為朝伝説を軸に、その背景となる日本の北と南の歴史を通史的に対比しつつ、日本という国の歴史がもった特質について考え

てみたいと思う。

なお本書では、日本およびヤマトと、日本人および和人の語を併用しており、厳密な使い分けを行うことは難しかった。また国の両端についても、史料的には北・南ではなく東・西と表現され、実際には東北・西南とすべきだが、本書では北海道・沖縄に重点をおくので、あえて北・南の語を用いた。ただ古代・中世を扱う部分では、北には東北北部を、南には九州南部を含む場合が多い。さらに、薩南諸島は屋久島・種子島とトカラ列島を、奄美諸島は奄美大島および喜界島以南から与論島以北を、沖縄諸島は沖縄本島および周辺離島を、先島諸島（＝八重山諸島）は宮古島・石垣島および周辺諸島を指し、沖縄列島は沖縄諸島と先島諸島を含むものとする。これらを総称した概念として南西諸島を用いるが、単なる南島の語には沖縄を含まない場合もある。

目　次

はじめに——英雄伝説と日本

序章　伝説の前史——北と南の原点 …… 1
1　北と南の考古学　2
2　古代国家のまなざし　7

第Ⅰ部　英雄伝説はどのように生まれたか——北と南の中世 …… 19

第一章　北の義経伝説——東北から蝦夷地へ …… 22
1　逃げのびる義経　22
2　語り広められる伝説　32

第二章　南の為朝伝説——南九州から琉球へ……48
1　交易ににぎわう南の島々　48
2　南下する為朝　59
3　琉球王国の成立とヤマト　74

第Ⅱ部　英雄伝説はどのように広がったか——近世の変容……89

第一章　海を越える義経伝説——蝦夷地から大陸へ……93
1　アイヌ民族のなかで　93
2　広まる「義経渡海説」　106
3　大陸へ渡る義経　119

第二章　浸透する為朝伝説——琉球王朝の祖として……137
1　薩摩の侵攻と為朝伝説　137
2　為朝中山王祖説はなぜ生まれたか　149
3　琉球使節と『椿説弓張月』　164
4　知識人たちの南北認識　175

第Ⅲ部　「史実」化していく伝説——帝国の「英雄」……183

第一章　義経伝説の飛躍——北海道開拓史のなかで……186

1　内国植民地化される蝦夷地　186

2　義経＝ジンギスカン説への熱狂　195

第二章　為朝伝説の完成——日本化の根拠に……204

1　琉球王朝の併合　204

2　帝国統治下の為朝伝説　210

終章　伝説の領域——北と南の相似性……221

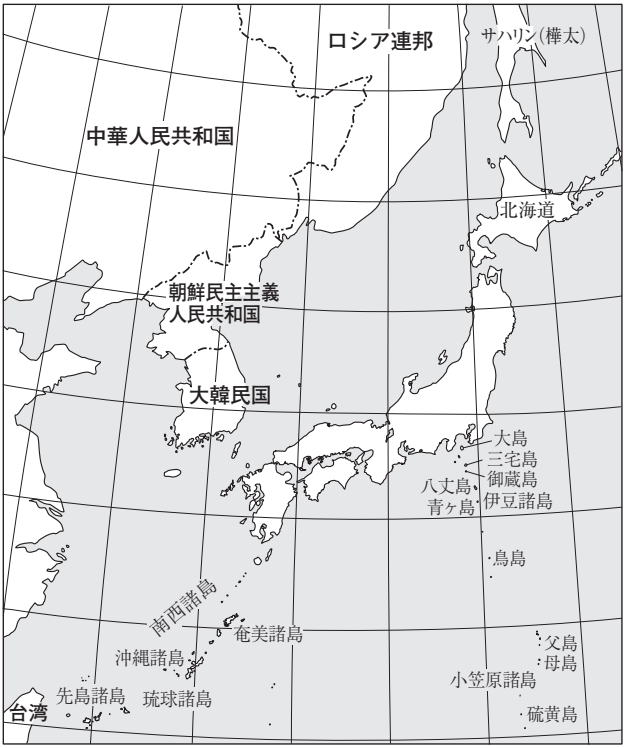
1　歴史と伝説の位相　222

2　生活と文化の領域　226

3　英雄伝説と東アジア　232

あとがき……239

主要参考文献

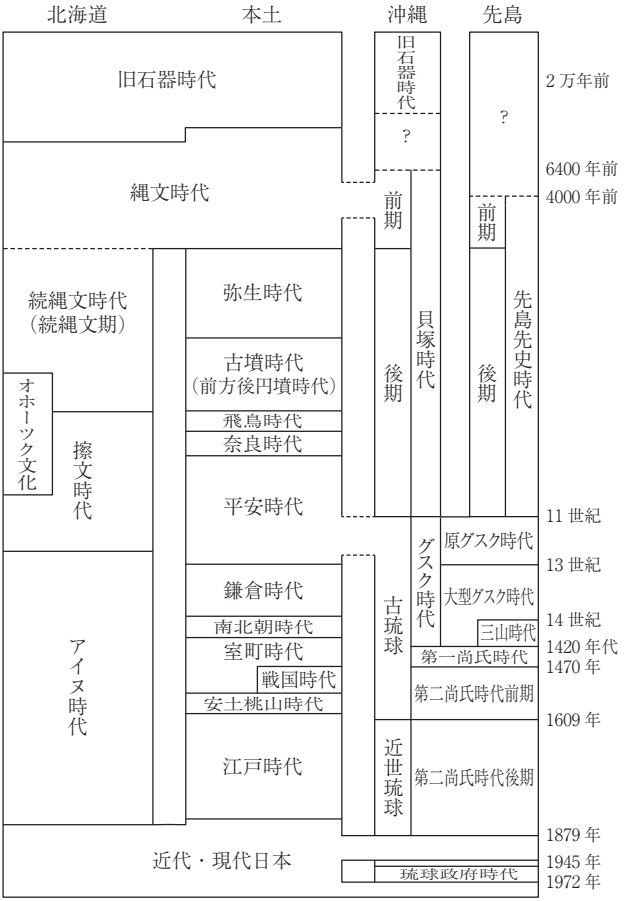

ロシア連邦
サハリン(樺太)
中華人民共和国
北海道
朝鮮民主主義
人民共和国
大韓民国
大島
三宅島
御蔵島
八丈島
伊豆諸島
青ヶ島
鳥島
南西諸島
奄美諸島
父島
母島
沖縄諸島
小笠原諸島
先島諸島
琉球諸島
台湾
硫黄島

北海道・東北図
サハリン
エトロフ（択捉）
クナシリ（国後）
（クナシリ・メナシの戦い）
余市
鵡川
平取
瀬棚
（シャクシャインの戦い）
志海苔館
知内
上ノ国
（コシャマインの戦い）
函館
松前
外ヶ浜
十三湊
石江遺跡群
弘前
志波城
出羽柵（秋田）
胆沢城
衣川
平泉
桃生城
多賀城
磐船柵
渟足柵

南九州・沖縄図
八代
水俣
万之瀬川下流遺跡群
鹿児島
坊津
竹島
馬毛島
黒島
硫黄島
種子島
口永良部島
屋久島
臥蛇島
口之島
悪石島
中之島
諏訪之瀬島
宝島
奄美大島
喜界島
加計呂麻島
城久遺跡群
与路島
請島
徳之島
伊平屋島
カムィヤキ焼窯跡群
伊是名島
沖永良部島
座間味島
粟国島
与論島
渡名喜島
沖縄本島
久米島
阿嘉島
渡嘉敷島
伊良部島
屋嘉比島
慶留間島
竹富島
台湾
西表島
石垣島
宮古島
水納島
与那国島
多良間島
波照間島
白保竿根田原洞窟遺跡

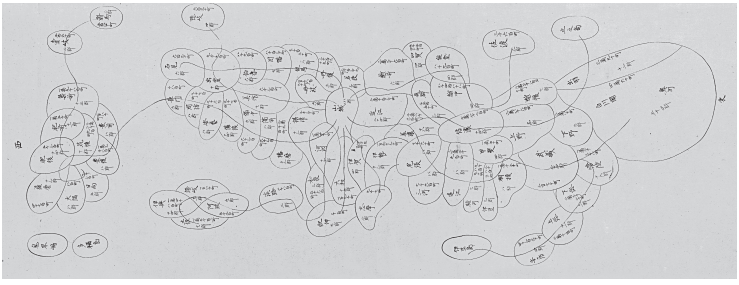
沖縄本島図
安須森御嶽
山原
伊江島
古宇利島
今帰仁城
運天
屋我地島
水納島
瀬底島
国頭
(北山)
名護
座喜味城
平安座島
伊計島
宮城島
勝連城
浜比嘉島
浮原島
南浮原島
中頭
(中山)
牧港
浦添城(ようどれ)
津堅島
那覇
首里城
島添大里城
斎場御嶽
久高島
サキタリ洞遺跡
港川遺跡
島尻大里城
島尻
(南山)

北海道・沖縄対比年表



作成・安里進（安里進・土肥直美『沖縄人はどこから来たか』ボーダー新書, 2011より）

序章
伝説の前史——北と南の原点



『集古図』所載「行基式日本図」(鎌倉末〜南北朝期). 中世の日本には北海道と沖縄が含まれていないことがわかる(国立国会図書館ウェブサイトより, 17 頁参照)

1　北と南の考古学

旧石器文化の時代

まずは二つの伝説を論ずる前に、その舞台となる北と南の地の特色を、歴史の初源からたどっておこう。

氷河期であった旧石器時代の日本列島は、海面が現在より約一〇〇メートル低く、大陸から弓状に連なり、北海道も沖縄も完全ではないがほぼ陸続きであった。旧石器時代後期には、北海道には広く遺跡が存在するが、沖縄では人骨は出土するものの遺物が少ない。この旧石器時代後期を特徴づける狩猟活動用のナイフ形石器は北海道でも認められるが、奄美・沖縄諸島ではこれがみられないという特徴がある。その後、このナイフ形石器は細石刃へと置き換わるが、その分布は、中国華北から入った西南日本の半円錐細石刃文化圏と、シベリアの影響を受けた東北日本の楔形細石刃文化圏とに大きく分かれ、北海道が後者の発信拠点だったとされる（佐々木高明『日本史誕生』）。

しかし奄美・沖縄諸島では、こうした細石刃が出土せず、自然石を打ち欠いただけの礫器系

が中心で、東南アジアから南方型旧石器文化が伝わったと推定されている（小田静夫『黒潮圏の考古学』）。日本史の初源において、列島の北と南では、それぞれ別個の生活が営まれていたのである（以下、巻頭対比年表参照）。

北の縄文・弥生並行期

今日の日本列島が地形的に形成された縄文時代の遺跡分布は、西南日本よりも東北日本に濃密である。とくに日本の北部では、ほぼ縄文時代を通じて、北海道の石狩平野以南の道南部から、東北地方の秋田県・岩手県北部にかけて、同一形式の土器が用いられており、津軽海峡を挟む地域に共通の物質文化圏が存在していた。しかし近年の人骨の炭素・窒素同位体分析によれば、津軽海峡の北と南では食生態系が明瞭に異なり、北海道では海洋哺乳類や魚類などの海産物が主体であったが、東北北部では海産物のみならず陸上植物資源に強く依存していたという（米田穣「縄文時代における環境と食生態の関係」）。

弥生時代に入ると、青森県では前期の砂沢遺跡や中期の垂柳遺跡で、水田址が確認されており、比較的早い段階に稲作文化が東北北部にまで広がったが、これらは海路による伝播の可能性が高い。しかし北海道には金属器は存在したが、稲作の導入がみられず、この時期の文化を続縄文文化と呼ぶ。ここでは縄文土器の系譜を引く土器が用いられ、前半期には道南に恵山式

土器が、後半期になると石狩低地帯に後北式土器が広がり、やがて北大式土器が全道を覆うようになる。

さらに続縄文系の後北式・北大式土器は、津軽海峡を越えて宮城県のほか山形県・新潟県の一部にも伝播し、東北北部を巻き込んで一つの土器文化圏を形成していた点が注目される。しかし食糧確保戦略としては、やはり津軽海峡を境に、東北北部では積極的に植物栽培を選択する志向が強かったが、北海道南部では海産物への依存度が高く続いたといい（米田前掲）、縄文時代から続く北海道の歴史的特性が受け継がれている。

南の縄文・弥生並行期

いっぽう奄美・沖縄諸島でも、古くから海洋への依存度が高く、縄文並行期を貝塚時代前期と称している。ここでは縄文早期に、九州系の爪形文式土器が登場するが、石鏃・石槍・掻器などを伴わず、土偶も存在しない。狩猟系石器の出土が少なく、採集や漁撈への依存度が高かったと判断される。

また縄文前期には、九州系の曽畑式土器が沖縄本島にまで及んでおり、さらには黒曜石の石鏃なども伝わって、南島に独自な縄文文化が形成されたとみなされている。たとえば栴ノ原遺跡（鹿児島県南さつま市）から出土した縄文早期の丸木船製作用の丸ノミ形石斧は東南アジア系に

属するが、これに続くものが奄美諸島や沖縄本島にも分布しており、一つの海洋文化圏を形成していた（小田前掲）。ただ縄文文化の影響は、奄美諸島に次いで沖縄諸島に強いが、先島諸島には及んでいない。とくに先島諸島には、縄文土器とは系統を異にする下田原式土器と局部磨製石斧を特徴とする南アジア系先史文化が定着していた。

そして奄美・沖縄諸島の弥生並行期については、とくに貝塚時代後期と呼び、平安中期頃まで続く。遺跡の大半は海岸砂丘上に立地し、イノー（珊瑚礁）での漁撈活動と陸地部での採集活動が中心であった。弥生式土器および弥生系の土器が用いられ、金属器の使用も始まるが、水田稲作が行われた形跡は確認されていない。

なお注目すべきは貝製品で、漁撈・採集の加工具や煮沸器としても使われたほか、貝輪などの装飾品にも利用された。すでに南城市のサキタリ洞遺跡からは、二万三〇〇〇年前の後期旧石器時代の貝の釣り針が出土したほか、続縄文時代の北海道の有珠遺跡からは、南海産のイモガイ製貝輪が出土しており、日本の北と南の両端を結ぶ貝の交易ルートが、古くから存在していたことがわかる。また縄文から弥生並行期の沖縄でも、食生態としては、海産物や動物食への依存度は高いが、植物食の利用度が低く（米田前掲）、北海道とよく似た傾向性が認められる。

北と南の人類学

酸性土壌では残りにくい旧石器時代の人骨は、アルカリ性の強い土壌の沖縄で出土する例が多く、約一万八〇〇〇年前とされる港川人（みなとがわじん）のほか、近年では石垣島の白保竿根洞（しらほさおね）やサキタリ洞でも二万年以上前の人骨が発見されている。こうした人骨を元とした日本人の成立をめぐる議論の有力な学説の一つに、自然人類学者・埴原和郎（はにわらかずろう）の二重構造モデル論仮説がある。

これは旧石器時代に、東南アジアのスンダランドにいた古モンゴロイドの一部が、琉球列島を経て日本に到達して縄文人となり、北海道から沖縄まで分布したとする説である。その後、中国東北部に到達していた新モンゴロイドの一部が、弥生時代に日本列島に渡来し、縄文人との混血によって現日本人が形成されたが、北海道と沖縄には及ばず、そこには古モンゴロイド的形質を持つアイヌの人々と沖縄人とが残ったという（埴原和郎『日本人の成り立ち』）。

なお港川人については、近年では縄文人とは形質が異なり、オーストラリア先住民やニューギニアの人々に近いとも考えられている（国立科学博物館の見解）。ただ近年ではＤＮＡによる分析が著しく進み、母系を示すミトコンドリアＤＮＡのほか父系の判明するＹ染色体の系統も明らかにされた。その結果、先住民であった古モンゴロイドの縄文人と渡来系の新モンゴロイドの弥生人の混血が進んで現在の日本人となったとする二重構造モデル論は、遺伝子解析の立場からも認められている（斎藤成也『ＤＮＡから見た日本人』）。

これによって、縄文人を起点とするアイヌ・沖縄同系論が支持されたことになるが、アイヌ集団には、やや異なるＤＮＡ系統も認められることから、五～一〇世紀頃にオホーツク文化人（後述）との間に深い交流があったとされており（篠田謙一他「ＤＮＡが語る「日本人への旅」の複眼的視点」）、彼らに関しては北方との関連を重視すべきだろう。また沖縄に関しては、港川人は島での生活環境に耐えられずに消滅したとする説があるほか（高宮広土『島の先史学』）、後に改めて述べるように（本書七八頁参照）、日本人との混血によって現代沖縄人が、日本の中世にほぼ相当するグスク時代に生まれたとする説もある（安里進・土肥直美『沖縄人はどこから来たか』）。

2　古代国家のまなざし

蝦夷への対応

北海道では縄文系の古モンゴロイド集団が続縄文文化を担っていたが、七世紀頃になると北部から東部にかけて、大陸北方系の海洋漁撈文化であるオホーツク文化が成立した。彼らオホーツク文化人は、農耕や家畜飼育を行って、鉄器や青銅器も使用していた。これに並行するかたちで続縄文文化のなかから擦文（さつもん）文化が生まれ、オホーツク文化と併存しつつ北海道南部を中心に東北北部にまで及んだ。

かつて日本に渡ってきて水田稲作を基礎とした新モンゴロイド系の人々は、徐々に列島に勢力を拡大して地方王権の象徴である古墳を各地に築き、やがて七世紀頃に大和地方を中心とした古代国家を出現せしめた。これに対して東北には、もともと古モンゴロイドのアイヌ系の人々が暮らしていたが、古代国家に結集したヤマト系の人々が進出して、その間で混血が進んだ。すでに五世紀末から六世紀初頭には、岩手県南部にまで古墳文化が及び、七〜八世紀頃になるとヤマト系の農耕民が大量に移住し混血に拍車がかかった。こうした文化接触が北海道にも影響を及ぼして擦文文化を成立させたという（瀬川拓郎『アイヌの世界』）。

この擦文文化は、オオムギ・アワ・ソバなどの農耕も行って、土師器系の擦文式土器や鉄器さらにはカマドを用いるなど、ヤマト的な生活文化の影響も強い。また擦文文化の段階には、北海道の石狩低地帯から東北北部に、北海道式古墳・蝦夷系古墳とも称される末期古墳も登場する。これらはヤマト政権の墳墓形式とは異なる規模や原理を有するが、土師器や須恵器を共伴するほか、玉や馬具さらには和同開珎などヤマトからの副葬品も伴う。つまり統一的な古代国家が勢力を誇った七世紀から一〇世紀の東北北部・北海道では、ヤマト的な文化を受け入れつつも、続縄文文化以来の独自な文化圏が築かれていたのである。

ヤマトの古代国家は、彼らを蝦夷と呼び、その支配下におこうとした。蝦夷とは、アイヌ民族を含む場合もあったが、基本的には古代律令国家の国郡制下には編入されなかった東北の

人々で、古モンゴロイドと新モンゴロイドが混合した擦文文化人と解すべきだろう。『日本書紀』（斉明天皇五＝六五九年七月三日条）所引の「伊吉連博徳書」には、蝦夷には、遠くから順に都加留・麁蝦夷・熟蝦夷の三種類があり、いずれも農耕はせずに肉を食する、としているが、一部では小規模な農耕も営まれたとすべきだろう。これらの差は混血の度合いによるものと思われ、もっとも近い熟蝦夷は、毎年ヤマト政権に朝貢を行っていた。さらに『続日本紀』には山夷と田夷がみえ、田夷と呼ばれて農耕を営み、官位を得た人々も存在した（天平九＝七三七年四月一日条）。こうした蝦夷のなかでもヤマト政権に服属した人々を夷俘と呼んだが、このうち納税負担を伴う編戸、つまり公民ではないが、王権に従う王民としての身分の者を俘囚と称した。たとえば蝦夷の族長クラスには、君子部という姓を与えて俘囚とし、いわゆる夷狄とは区別し、氏姓制度的な王権秩序のうちに編入したのである。

隼人と南島の地位

九州南部の「熊襲・隼人」については、『古事記』『日本書紀』の神代紀などにみえるが、これらには伝承的な色彩が強い。これを考古学的にみれば、古墳時代の九州南部には、いずれも隼人の墓制と考えられる地下式横穴墓がその東側に、地下式板石積石室墓がその西側にあるほか、薩摩半島南端には土壙墓が分布する。五世紀後半になって、日向地方などにヤマト文化の

影響を受けて前方後円墳が登場をみるが、薩摩・大隅地方には前方後円墳が少なく、カマド付き住居や須恵器が確認されておらず、ヤマト文化の影響を部分的には受容したものの、基本的に隼人の人々は独自の地域文化圏を築いていたと考えられる。

なお南島のうち多禰島（種子島）については、天武天皇一〇（六八一）年にヤマトからの使者が「多禰国の図」を持ち帰っており（『日本書紀』同年八月二〇日条）、「粳稲常に豊なり。一たび殖えて両たび収む」とみえ、稲の再生二期作が行われたほか、海産物にも恵まれていたという。さらに八世紀初頭頃に多禰島司がおかれ、掖玖島を含む地方行政単位としての多禰島が成立をみて、大宰府の管轄下に入った。なお天平七（七三五）年には、南島の島々に立てた標札の立て替えが命じられている（『続日本紀』天平勝宝六＝七五四年二月二〇日条）。標札には島名・停泊場所・水場所・島々への行程などが記され、古代国家は南島の詳細な情報を掌握していた。

また隼人は大化前代から軍事部門を担ったとする伝統から、律令官制下には隼人司がおかれ、一部の隼人は宮廷の儀礼などに古くから参加していた。さらに霊亀元（七一五）年以降は、それまで正史類に蝦夷と並記され蔑視されていた隼人が、南島と置き換わるようになって、隼人は蝦夷・南島とは別格とされ、王民的な扱いとなったとされている（永山修一「隼人をめぐって」）。こうして九州南部の隼人は、八世紀前半に独自の地位を獲得したのである。